

うつせみ

樋口一葉

青空文庫

家の間数まかずは三疊敷の玄関までを入れて五間、手狭てぜまなれども北南
 吹とほしの風入かぜいりよく、庭は広々として植込の木立も茂ければ、
 夏の住居すまゐにうつつつけと見えて、場処こいしかはも小石川の植物園にちか
 く物静なれば、少しの不便を疵きずにして他には申旨むねのなき貸家あり
 けり、門かどの柱に札をはりしより大凡おほよそ三月ごしにも成けれど、い
 まだに住人すみてのさだまらで、主ぬしなき門の柳のいと、空むなしくなびくも
 淋さびしかりき、家は何処どこまでも奇麗にて見こみの好よければ、日のう
 ちには二人三人の拜見ふたりみたりをとて来るものも無きにはあらねど、敷金

三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七円五十銭といふに、それは下町の相場とて折かへして来るは無かりき、さるほどにこのほどの朝まだき四十に近かるべき年輩としごろの男、紡績織の浴衣ゆかたも少し色のさめたるを着て、至極そそくさと落つきの無きが差配のもとに來たりてこの家の見たしといふ、案内して其処そこ此処と戸棚の数などを見せてあるくに、それ等のことは片耳にも入れで、唯四ただあ辺たりの静にさわやかなるを喜び、今日より直すぐにお借り申まする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しはこの夕暮、いかにも急速では御座りますが直様すぐさま掃除にかかりたう御座りますとて、何の子細なく約束はととのひぬ、お職業はと問へば、いゝ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧あいまいの答へなり、御人数ごにんずはと聞か

れて、その何だか四五人の事も御座りますし、七八人にも成りま
 すし、始終とほしごたごたして埒らちは御座りませぬといふ、妙な事と思
 ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り来たりしは、相乗りの幌ほろ
 かけ車に姿をつつみて、開きたる門を真直に入りて玄関におろし
 ければ、主ぬしは男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗り
 ゐたるは三十ばかりの氣の利ききし女中風と、今一人は十八か、九
 には未いまだと思はるるやうの病美人びやうびじん、顔にも手足にも血の氣とい
 ふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼あをしろ白しろきがいたましく見え
 て、折から世話やきに来てゐたりし、差配が心に、此人これを先刻さきの
 そそくさ男が妻とも妹いもととも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八だいはちに唯ただ一くるま来たりしばかり、両隣にお定

めの土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極ひつそりとせし物なり。人数はかのそそくさにこの女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど来たりし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髪いはつの老人、一人は妻なるべし対するほどの年輩にてこれは実法まるまげに小さき丸鬚をぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕くくに頭つむりを落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄しよんぼり然とせし老人二人の面おもやう、何処どこやら寝顔に似た処のあるやうなるは、この娘このもしも父母にては無きか、かのそそくさ男を始めとして女中ども一同旦那さま御新造様ごしんぞさまと言へば、応々おいおいと返事して、男の名をば太吉たきち太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すずしきほどに今一人車を乗りつけける人の有けり、
 つむぎひとへ
 紬の単衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯ひげのある三十
 位のでつぷりと太て見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て張
 りたるを讀みて此処だ此処だと車よりおりける、姿を見つけて、
 おお番町の旦那様とお三どんが真先に襷たすきをはづせば、そそくさは
 飛出していやお早いお出いで、よく早速おわかりに成りましたな、昨きの
 のふ
 日まで大塚おほつかにお置き申したので御座りますが何分最早も、その何
 だか頻しきりに嫌いやにお成りなされて何処どこへか行かう行かうと仰おつしやる、
 仕方が御座りませぬで漸やつとまあ此処をば見つけ出しまして御座り
 ます、御覧下さりませ一ちよいと寸いこうお庭も広う御座りますし、四隣まはり
 が遠うござりまするので御気分の為にも良からうかと存じまする、

はい昨夜はよくお眠に成ましたが今朝ほどは又少しその、一寸御
様子が変つたやうで、ま、いらしつて御覧下さりませと先に立て
案内をすれば、心配らしく髭をひねりて奥の座敷に通りぬ。

二

気分すぐれて良き時は三歳児のやうに父母の膝に眠るか、白紙
を切つて姉様の製造に余念なく、物を問へばにこにこと打笑み
て唯はいはいと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢を
うごかして来る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰
れも後生顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、声は

腸はらわたを絞しぼり出すやうにて私が悪わるう御座ござりました、堪かんにん忍にんして堪忍かんにんしてと繰返くりかへし繰返くりかへし、さながら目の前の何やらに向つて詫わびるやうに言ふかと思へば、今行ゆきまする、今行ゆきまする、私もお跡あとから参りまするとて日のうちには看護まもりの暇ひまをうかがひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋ふたを置き、きれ物ものとしては鋏はさみ刀ちやう一挺目ひとにかからぬやうとの心配あやふりも、危あやふきは病あやふひのさする業わざかも、この纖弱かよわき娘一人とり止むる事かなはで、勢いきほひに乗りて駆け出す時いには大の男二人がかりにてもむつかしき時の有ける。

本宅は三番町の何処どこやらにて表札うらなを見ればむむあの人の家かと合点あつちんのゆくほどの身分身分、今さら此処こゝには言はずもがな、名前の恥はづかしければ病院へ入れる事もせで、医者は心安やすきを招き家は僕ぼくの

太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ処に住へば見る物残らず嫌やに成りて、次第に病ひのつゝの事見る目も恐ろしきほど悽^{すさ}まじき事あり。

当主は養子にて此^{これ}娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎^{なげ}きおもひやるべし、病ひにふしたるは桜さく春の頃よりと聞くに、それよりの昼夜^{まぶた}を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろよろたよたよと二人ながら力なきささうの風情^{ふぜい}、娘が病ひの俄^{には}かに起りて私はもう帰りませぬとて駆^{いだ}け出すを見る折にも、あれあれどうかしてくれ、太吉太吉と呼立てるほかには何の能なく情なき体^{てい}なり。

昨夜^{ゆふべ}は夜もすがら静に眠^{ねぶ}りて、今朝は誰れより一はな懸けに目

を覚し、顔を洗ひ髪を撫なでつけて着物もみづから氣に入りしを取と
りいだ出し、友仙の帯に緋ひぢりめんの帯あげも人手を借かずに手ばしこ
 く締しめたる姿、不ふ図と見たる目にはこの様の病人とも思おひ寄よるまじ
 き美うくしさ、両ふた親おやは見返かりて今更なに涕なぐみぬ、附つそひの女かが粥かゆ
 の膳ぜんを持も来きたりて召め上ありますかと問とへば、嫌きらや嫌きらやと頭つむりをふりて
 意い氣き地ぢもなく母ははの膝ひざへ寄よそひしが、今日けふは私わたしの年ねん季きが明あまするか、
 帰かる事ことが出来るで御座ごんせうかとて問とひかけるに、年ねん季きが明あると
 いいつて何なに処ところへ帰かるら了ら簡かん、此こゝ処ところはお前まへさんの家では無ないか、この
 ほかに行くところも無なからうでは無ないか、分わらぬ事ことを言いふ物では
 ありませぬと叱しかられて、それでも母はは様さま私わたしは何なに処ところへか行くので御座
 りませう、あれ彼方あそこに迎むかひの車くるまが来きてゐます、とて指ささすを見

れば軒端のきぼのもちの木に大いなる蛛くもの巣のかかりて、朝日にかがやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君あなたお聞遊あなしましたかと良人をとつに向ひて忌いまはし氣にいひける、娘は俄しほに萎しほれかへりし面おもてに生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年をととしのお花見の時ねと言いひ出す、何いゑと受けて聞きければ学校の庭は奇麗あなたでしたねへとて面しろさうに笑ふ、あの時貴君あなたが下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれどももう萎しほれてしまひました、貴君にはあれから以来御目にかからぬでは御座んせぬか、何故なぜ逢あひに来て下さらないの、何故帰つて来て下さらぬの、もうお目にかかる事は一生出来ぬので御座んするか、それは私が

悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄にいさま様が、兄が、ああ誰れにも済ませぬ、私が悪う御座りました免ゆるして免してと胸を抱いて苦しさうに身を悶もだゆれば、雪子や何も余計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病気なのだから、学校も花もありはしない、兄にいさん様も此処にお出でなさつてはゐないのに、何か見えるやうに思ふのが病気なのだから気を落つけて旧もとの雪子さんに成ておくれ、よ、よ、気が付きましたかへと脊せを撫でられて、母の膝の上にすすり泣きの声ひくく聞えぬ。

番町の旦那様お出いでと聞くより雪や兄様にいさんがお見舞に来て下され
 たと言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無礼を、常ならば怒り
 もすべき事なれど、ああ、捨てて置いて下さい、気に逆らつても
 ならぬからとて義母ははが手づから与へられし皮蒲団かはぶとんを貰もらひて、枕まくら
 もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱きはの際きわに黙然もくねんとしてゐ
 る父に向ひ、静に一つ二つ詞ことばを交へぬ。

番町の旦那といふは口数少なき人と見えて、時たま思ひ出した
 やうにはたはたと団扇うちはづかひするか、巻煙草まきたばこの灰を払つては又
 火をつけて手に持もつてゐる位なもの、絶えず尻目しりめに雪子かたの方を眺め
 て困つたものですと言ふばかり、ああこんな事と知りましたら
 早くに方法も有つたのでせうが今に成つては駟馬しめも及ばずです、

植村も可愛想かあいさうな事でした、とて下を向いて歎息たんそくの声を洩もらすに、どうも何とも、我は悉しつ皆世かいせ上じやうの事に疎うとしな、母もあの通りの何であるので、三方四方ちやう埒ちやうも無い事に成つてな、第一は此娘これの気が狭いからではあるが、否いや植村も気が狭いからで、どうもこんな事になつてしまつたで、我等わしども二人が実まことに其方そちらに合はせる顔も無いやうな仕義しぎでな、然し雪をも可愛想かあいさうと思つて遣やつてくれ、こんな身に成つても其方そちらへの義理ばかり思つて情ない事を言ひ出しをる、多少教育も授けてあるに狂氣きやうきするといふは如何いかにも恥かしい事で、この方から行くと家の恥辱にも成る実に憎むべき奴ではあるが、情実じやうじつを汲くんでな、これほどまで操みさをといふものを取止めて置いただけ憐あはれんで遣やつてくれ、愚鈍ぐどんではあるが子供の時からこ

れといふ不出来ふでかしも無かつたを思ふと何か残念の様にもあつて、
誠の親馬鹿といふので有らうが平癒なほらぬほどならば死ぬとまでも
諦あきらめがつきかねる物で、余り昨今忌はしい事を言はれると死期しごが近
よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家うちには何か迎ひに来る
物が有るなどと騒ぎをやるにつけて母がつまらぬ易者などにでも
見て貰つたか、愚ぐな話しではあるが一月のうちに生せい命めいが危ふい
とか言つたさうな、聞いて見ると余り心よくも無いに当人も頻しきりと
嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此処を探させ
ては来たが、いやどうも永持はあるまいと思はれる、殆ほとんど毎日死ぬ
死ぬと言って見る通り人間らしい色いろつや艶もなし、食事も丁度一週間
ばかり一粒りつぶも口へ入れる事が無いに、そればかりでも身体からだの疲労

が甚しからうと思はれるので種々いろいろに異見も言ふが、どうも病ひの故せいであらうかとかくに誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、医者は例の安田が来るのでかう素しろうと人まかせでは我ままばかりつものつて宜く有るまいと思はれる、我の病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、それもどう有らうかと母などは頻しきりにいやがるので我も二の足を踏ふんでゐる、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分この頃飛出しが始まつて、我わしなどは勿論太吉と倉くらと二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、万一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往わうらい来へ飛出されても難義至極なり、それ等を思ふと入院させやうとも思ふが何か不憫ふびんらしくて心一つには定めかねるて、

其方そちらに思よりひ寄よりも有ありあらば言いつて見みてくれとてくるくと剃そりたる頭つむりを撫なでて思おも案あんに能あたはぬ風ふう情じやう、はあはあと聞きゐる人も詞ことばは無なくて諸もろとも共ともに溜ため息いきなり。

娘むすめは先さき刻ときの涙なみだに身みを揉もみしかば、さらでもの疲つかれ甚こしく、なよなよと母ははの膝ひざへ寄よ添そひしまま眠ねむれば、お倉くらお倉くらと呼よんで附つ添そひの女子をなごと共に郡ぐん内ないの蒲よもぎ団だんの上うへへ抱いだき上あげて臥ふさするにはや正ただ体たも無なく夢ゆめに入いるやうなり、兄あにといへるは静しずに膝ひざ行い寄りてさしのぞくに、黒くろく多おほき髪かみの毛けを最い惜としげもなく引ひつめて、銀ぎん杏ぎやう返がへしのこはれたるやうに折お返かへし折お返かへし鬚まげ形なりに畳たたみこみたるが、大方おほ横よこに成なりて狼ろう藉ぜきの姿すがたなれども、幽ゆう霊れいのやうに細こく白しろき手てを二ふたつ重おもねて枕まくらのもとに投なげ出いだし、浴ゆ衣かたの胸むね少すくしあらはに成なりて締ひめたる緋ひ

ぢりめんの帯あげの解けて帯より落かかるもなまめ廻かしからでいた惨ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふしすずりすずり硯々と呼び、書物よむとて有し学校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたるほごがみ反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正体得しえれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに読まれたるは村といふ字、郎といふ字、ああ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

今日是用なしの身なればとて兄は終日此処にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す看護の女子に替りて、どれ少し我がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いいさ先させて見てくれるとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心付れども何の事とも聞分ぬと覺しく、目は見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と声を限りに呼ばば、こらどうした、蝶も何も居ない、兄は此処だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、ゑ、見えるか、

兄だよ、正雄だよ、気を取直して正気になつて、お父さんやお母さんをお前さんを安心させてくれ、こら少し聞分てくれ、よ、お前がこの様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠に成つた事はない、お疲れなされてお瘦せなされて介抱してゐて下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく了解る人では無いか、気を静めて考へ直してくれ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、あれは快よく瞑する事が出来ると遺書にも有つたと言ふでは無いか、あれは潔よくこの世を思ひ切つたので、お前の事も合せて思ひ切つたので決して未練は残してゐなかつたに、お前がこの様に本心を取乱して御両親に歎をかけると言

ふは解らぬでは無いか、あれに対してお前の処置の無情であつたもあれは決して恨んではゐなかつた、あれは道理を知つてゐる男であらう、な、さうであらう、校内一流いちの人だとお前も常に褒めほたではないか、その人であるから決してお前を恨んで死ぬ、そんな事はある筈はずがない、憤りいきどほは世間に対してなので、既に其事それは人も知つてゐる事なり遺書ゆゑしよによつて明かでは無いか、考へ直して正気に成つて、その後の事ごとはお前の心に任せるから思ふままの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないで、御両親がどれほどお歎きなさるかを考へて、氣を取直してくれ、ゑ、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるでは無いか、医者にも及ばぬ、薬にも及ばぬ、心一つ居処をたしかにしてな、直つてくれ、

よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯うなづいて、はいはいと言ふ。

女子どもをんなは何時いつしか枕もとを遠慮はづして四辺あたりには父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覚えねども兄にいさん様兄様と小さき声に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身体からだが痛くてと言ふ、それは何時も気の立つままに駆け出して大の男に捉とらへられるを、振はなすとして恐ろしい力を出せば定めし身も痛からう生なまきず疵ところどころも処々とこに有るを、それでも身体の痛い知れるほどならばとはかなき事をも両親ふたおやは頼もしがりぬ。

お前の抱かれてゐるは誰君どなた、知れるかへと母親の問へば、言下ごんか

に兄様にいさんで御座りませうと言ふ、さうわかればもう子細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、知つてゐます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同かほを見合せて情なき思ひなり。

よしやばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き声して、もう後生ごしようお願ひで御座ります、その事は言ふて下さりませぬ、そのやうに仰せおほ下さりましても私わたしにはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るいづに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何処へお出遊いでばすのと岸破がばと起きて、不意に驚く正雄の膝ひざを突のけつつ椽えんの方へと駆け出いだすに、それとて一同ばらばらと勝手より太吉おくらなど飛来るほどにさのみも行かず椽先の柱の

もとにびたりと坐して、堪かん忍にんして下され、私が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君あなたに悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふてはをりまするけれど。むせび泣きの声聞え初めてそ断続の言葉その事とも聞わき難く、半かかげし軒すだればの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日もをととひ、三月の以前もその前も、更ことに異なる事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給たまへと言ふ言葉、学校といひ、手紙といひ、我罪、

おあとから行まする、恋しき君、さる詞ことばをば次第なく並べて、身
 は此処ここに心はもぬけのからに成りたれば、人の言へるは聞き分わるよし
 も無く、樂しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸いだを抱いだき
 て苦悶くもんするは遣るかた無かりし当時のさまの再び現うつにあらはるる
 なるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三
 どのの末まで嬢さまに罪ありとはいささかも言はざりき、黄八丈
 の袖そでの長き書生羽織めして、品のよき高たか髻まげにお根がけは桜色を
 重ねたる白の丈たけ長なが、平打ひらうちの銀簪ぎんかん一つ淡あつ泊さと遊あそびて学校が
 よひのお姿今も目に残りて、何時いつ旧もとのやうに御平癒あそばすやら
 と心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、

何があの色うちの黒い無骨らしきお方、学問は急らからうともどうで
 此方のお嬢さまが対つにはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三
 の力めば、それはお前が知らぬからそんな憎くていな事も言へる
 ももの、三日交つきあひ際ひをしたら植村様のあと追さんづふて三途さんづの川まで行
 きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方あなたと
 は質たちが違ちがふて言ふに言はれぬ好いい方であつた、私でさへ植村様が
 何だと聞いた時にはお可か愛あい想さうな事をと涙がこぼれたもの、お嬢
 さまの身に成つては愁つらからうでは無いか、私やお前のやうなお
 つと来いならば事は無いけれど、不断つつしんでお出遊しゆばすだけ
 身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方をかう言ふては悪
 いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病い気になるほどの心

配は遊ばすまいに、さういへば植村様が無かつたら天下泰平に納まつたものを、ああ浮世は愁つらいものだね、何事も明あけすけに言ふて除のける事が出来ぬからとて、お倉はつくづく儘ままならぬを傷いたみぬ。つとめある身なれば正雄は日毎ひごとに訪とふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な夜な車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辞す時あり、稚おさなご子のやうに成りて正雄の膝を枕にして寝ねる時あり、誰たが給仕にても箸はしをば取らずと我わが儘ままをいへれど、正雄に叱しかられて同じ膳かゆの上に粥かゆの湯をすすする事もあり、癒なほつてくれるか。癒なほります。今日癒なほつてくれ。今日癒なほります。癒なほつて兄にいさん様のお袴はかまを仕立て上げます、お召めしも縫ぬいふて上げます。それは辱かたじけなし早く癒なほつて縫ぬいふてくれと言へば、さうしましたら

ば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むむ逢はして遣る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させてくれ、宜いかと言へば、ああ明日は癒りますると憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ来るに、容体ことごとく変りて何を言へども嫌々として人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば広き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよく成し八月の中旬より狂乱いたく募りて人をも

物をも見分ちがたく、泣く声は昼夜に絶えず、眠るといふ事ふつ
 に無ければ落入たる眼にまなこ形ぎやうさう相すさまじくこの世の人とも覚え
 ず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に
 逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てて姿を
 見るばかり、霧の立おほふておほろげ臃あした気なれども明日は明日はと言ひ
 て又そのほかに物いはず。

いつぞは正気に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折の
 有りもやすと覚おぼつか束なくも一日二日と待たれぬ、空うつせみ蝉はからを
 見つつもなぐさめつ、あはれ門かどなる柳に秋風のおと聞えずもがな。

青空文庫情報

底本：「にげりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2005（平成17）年5月20日126刷

初出：「讀賣新聞」

1895（明治28）年8月27日号～31日号

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

入力：岡村和彦

校正：青米

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うつせみ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>